

平和を願う作文

被爆国、日本から願う平和

柴田 瑞稀

私は、戦後六十九年の二〇一四年夏、広島の平和記念式典に参加しました。多くの国から人が集まっていて、日本が唯一の被爆国としての役割を果たしている、と感じました。

間もなく、終戦から七十年が経とうとしています。戦争を体験した日本人の平均年齢は上がり続け、本当の戦争を知らずに『平和』について考えている世代が社会の中心になってきています。私も戦争についての知識は乏しく、平和について考える機会こそあったものの、「では、『平和ではない』とは何か」という問いに上手く答えられず、『平和』についての理解を深めることができませんでした。

広島に行き、被爆体験者のお話を聞いた事により、戦争について深く知ることができました。そして、『平和』について、考える機会が生まれました。しかし、私は『『平和』とは何か』という問いに答えることができません。

私は、新聞やテレビ、インターネットからニュースを見ることが多いです。それを見ていて感じるのは、「終戦時と今とで、『平和』のあり方が違う」という事です。終戦時は、日本は武力を所持しないとありましたが、今は集団的自衛権の行使などが話題です。前者も後者も「平和のため」ならば、『平和』の意味が変わっているのではないかと思えます。

『平和』の本当の意味を理解していない私が言える事ではありませんが、私がこの被爆国、日本から願う平和は、「年月が経つても変わることはない平和」です。次の世代に、「あのころの平和」とは言われないような、どの世代の人々にも納得されるような平和を願い、それを実現する努力をしていきます。

今の平和を守るため

溝畑 詩織

今、この世の中で戦争というものを体験した人達はとても少ないです。また、その中でも原爆というものを体験した人はさらに少ないです。私はそのような人達が全員いなくなつて戦争という悲惨なものがなかつたことにされるのが嫌で広島の施設見学会に参加しました。

私は実際に被爆体験者に話を聞いたり、いろいろな資料を見たりすることで「原爆」と「戦争」というものをこの目で確かに見たような三日間になりました。話を聞いた梶山さんは親友の石堂さんが被爆して死に、自分だけ生き残つたことに罪悪感を持っていると話していました。別に話を聞いた北川さんは目の前で学校が燃えている中、他の友人達を助けられなかつた事がくやしかつたと話していました。

このように、戦争でついた心の傷は皆いえていません。戦争や原爆は物理的に人や物を

傷つけるだけでなく、精神をも傷つけます。最近は何んて昔のこと、などと思つてい
るような人がいます。私はそれに対してとても残念な思ひでいます。今もまだ核兵器を持っ
ている国はあります。つまり戦争が再びおこつたらまた広島や長崎のようなことがおこり
うるのです。またたくさん罪のない人々が死んだり苦しむ可能性があるのです。こうし
たことから、私は平和を願うにあたり、いろいろな人に戦争のことについて見て、聞いて
学んでほしいと思ひます。私は実際に広島を見て、学んで来たことにより、より深く戦争
について知ることができました。これからの未来をつくる私達が戦争を知ることと戦争を
おこさせないようにできると思ひます。

私達一人ひとりが戦争をしないという思ひを持ち、今の平和が続いて欲しいと思ひます。

平和を願う

副島 陸

「平和」。この二文字にどれほどの思いがまつているのかを僕は広島平和啓発施設見学会で知ることが出来ました。

八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下され、一瞬にして広島約十四万人が亡くなつてしまいました。また、それは命だけでなく、多くの人の家族、人生を奪つていてしまいました。何とか生き残つた人は、家に帰る途中、体がやけどでただれている人や、倒れている人がたくさんいて、目をそらして帰つたそうです。さらに周りからは、うめき声が聞こえ、悲惨な光景が歩くたびに広がっていました。運よく生き延びた人は他の亡くなつてしまった人々に申し訳ないという思いがあつたそうです。そして自分が生き残つたことへの罪悪感は今でも忘れられないそうです。僕はこれらを被爆体験者から聞き、戦争は恐ろしいことだと強く思いました。また、今でも原爆の後遺症で苦しんでいる人の

ためにも、平和を維持していかなければならないと改めて思います。昔は「平和」という考え自体なかったそうです。今の「平和」は過去のつらく、苦しい歴史があつたから生まれた考えなのです。だからこそ平和を維持しなければいけないのです。原爆投下という悲劇を再び起こさせないために、「戦争をしない」という信念を僕は貫ぬいていこうと思います。

広島平和啓発施設見学会を通して

門原 志歩

私は「今のこの生活ができること」が平和だと思います。あたりまえのことだともうかもしれませんが、これは実際に広島に行つて当時のことを学んだり、被爆体験者の方々から話を聞いて思つたことです。

広島に行くまで、私は平和や戦争についてじっくり考えたことがありませんでした。私が戦争や平和について考えたのは、歴史や国語の授業で戦争や戦時中のことについて学んだり、図書館に展示してあつた当時の写真を少し見たときくらいでした。でも心のどこかで「ちゃんと知らなくちゃいけないんじゃないか」と思う自分もいました。

そんなとき、先生から「広島平和啓発施設見学会に参加してみないか」と言われました。私は、これは平和や戦争についてじっくり考えるいい機会だし、とてもいい経験になるはずと思ひ、参加を決意しました。

行く前に少しだけ教科書などで戦争のことを勉強しました。でも実際の建物などを見ると比べものにならないくらいに衝撃を受けました。見学会では被爆体験者の方々から当時のお話を聞いたり、資料館などを見学したり、平和記念式典に参加したりしました。被爆体験者の方々からお話を聞いたことは、この見学会の中でも特に貴重な経験でした。戦争は私たちが想像していたものよりも、もつと悲惨なものでした。物を十分に得ることができなかつたこと、学校に行ってもあまり勉強できなかつたこと、当時の敵国への思いや、十分な暮らしができなくても、それをあまりつらいと感じなかつたことなどたくさんのお話を聞かせていただきました。これと同じくらい印象に残っているのは、広島平和記念資料館を見学したことです。復元模型や当時の写真、当時のまま残っているものなどがありました。街中にも、戦時中からずっと残っている建物があり、そのどれもが戦争の悲惨さを物語っていました。それでも、広島駅の近くなどの中心地は、約七十年前に戦争が起っていたことが信じられないような所でした。

私は、広島平和啓発施設見学会を通して、学校に行つて勉強できること、十分にものがあること、ちゃんと食事ができること、そんなあたりまえのことの大切さを学びました。

戦争が終わつてから約七十年が過ぎました。被爆体験者の方々もだんだん少なくなつてきています。つまり、当時のことを語れる人が少なくなつていて、戦争の悲惨さを伝えら

れる人が減っているということです。それを補うのが広島平和啓発施設見学会に参加した私たちの役割だと思います。

一人ひとりが戦争の悲惨さと向き合い、平和について考えてくれば、戦争が起きることはないと思います。今のこの生活ができるという「平和」がずっと続くことを、私は願います。

本当の平和を目指して

高橋 玄

本当の平和とは何だろうか。辞書を開いてみると、こう書いてあった。「平和とは、おだやかにやわらぐこと、戦争がなく安らかであること。」そう考えると、現在の日本はとも平和であるといえるだろう。

しかし、過去には今の平和が考えられないくらい悲惨な出来事が起こっていたのである。それは、第二次世界大戦中の事。一九四五年、終戦のきつかけとなった、八月六日に広島、そして八月九日に長崎への原子爆弾の投下だった。それにより、栄えていたまちは一瞬にして壊滅状態になってしまったという。

僕は夏休みに、「広島平和啓発施設見学会」という会に参加して、平和について学ぶため、実際に広島へ行ってきた。僕は戦争を体験したことがないので、原爆が落とされた広島をこの目で見るということはとても貴重な体験であった。

その学習の中で、まず印象に残ったものは平和記念資料館だ。平和記念資料館は、広島に原爆を投下された当時の状況を物語る遺品や写真がたくさん置かれている場所だ。僕はそこで、当時の惨禍を思い知らされた。繁栄していたまちが焼け野原になったことを示す写真や被爆した人々の写真を見ているうちに、気持ちが悪く沈んでいくのが自分でもわかった。その後、広島市の原爆投下を実際に体験された方にお話をうかがうことができた。その人は、原爆が落とされたその時、爆心地から約二キロメートル離れた、広島駅の外側において、多少の火傷は負ってしまったものの、重い後遺症にはかからずに済んだそうだ。爆心地の方からは、もくもくとときのこ雲がのぼっていたようだが、しばらくの間は何が起こったのかがわからなかったとおっしゃっていた。

原爆を落とされてからしばらくした後、被害のあった方へ足を運んだところ、元の繁栄していたまちはすでになく、瓦礫の山と化したモノが残る焼け野原が広がっていたという。周りには、原爆の熱に巻き込まれて皮膚が溶け、垂れ下がってしまったている人々が助けを求めて彷徨っていたそうだ。資料館でも、その悲惨な光景が再現されていた。

それから、その体験者の方はこう言った。「彼らを助けてあげられなかったことをとても後悔している」と。思い返してみれば、広島で出会った別の方も同じことをおっしゃっていた。そこで僕は思った。被爆された方々は、自分たちも辛い目にあっているが、それ

よりも自分の大切な人達を亡くすことの辛さがどれほど大きなものだったのか、ということ、そして、それほど戦争は悲惨である、ということ。

この時語ってくれた人々が戦争を知らない若い世代に語って下さっているのは、次世代の平和への願いだと思うので、我々もその意志を心に受け止めて、身近な人達や、自分の後の世代へ、平和の精神がつかないでいけるよう努めていきたいと思う。戦争がなく、安らかである、本当の平和を願って…

原爆

相原 歩美

私は夏休みに、初めて広島へ行き実際に当時の写真や品物を見て、触れて、考えてきました。そして、改めて原爆のおそろしさや、当時の生活の大変さ、そして今が平和であることの大切さ、ありがたさを実感しました。

私は今まで、戦争や原爆については社会の授業でしか学んだことがありませんでした。しかもあまり細かいところまでは学ばず、昔の生活風景や、当時戦争へ行った青年達の思いを読むなど、すぐに終わってしまいました。しかし今回は、実際に資料館へ行き、写真を見たり、当時の本物の衣服や日用品に触れ、資料を読み、深く考えました。他にも平和の集いに参加したり、被爆体験者からも話を聞いたり、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式に出席するなど、たくさんの人と関わり、意見交換をし、更に深く学びました。そして私は二つの事を思い考えました。

一つ目は広島平和記念資料館に行ったときのことです。資料館にはたくさんさんの写真や説明文、図や絵、衣服や日用品が置いてありました。そこには学校の教科書や資料集には載っていない衝撃的な物がたくさんありました。図では核分裂についてくわしく書いてありました。それらを見た私は最初、声が出ませんでした。何と表せば良いのか分からなかったのです。私はとても悲しく、そしてたつた七十年ほど前に今私が立っている場所にこれほどおそろしい事が起こっていたのかと思うとひどく心が痛みました。

二つ目は被爆体験者からのお話を聞いたときのことです。私はこのお話を聞くまでずっと生き残って良かったかと思いついていました。しかしそんな私の考えとは真逆のことを語ってくれました。私が話を聞いた梶山さんは、友達のお話へ行つたとき彼女らの両親から、学校を休んだために生き残ることができたという言われ方をしたそうです。もし私が梶山さんの立場だったらとてもたえられません。しかも梶山さんはたくさんの方々の死体を見たそうです。そして今もはつきりと覚えていて、私は今までそんな辛く悲しい記憶と共に生きていて、しかもそんな大変な過去を語っている梶山さんはとてもすごいと思いました。

私はこれら二つの事について注目し、深く考えました。私はもう二度とこんな惨劇はくり返してはいけないと思います。その為にはこれから生まれてくる新しい世代の子にも

しっかりとした原爆の知識をあたえることだと思えます。原爆を持っている国はまだたくさんあります。だから過去の事とは思わずきちんと学ぶことがとても大切だと思います。私は今回学んだことを一生忘れません。